

日比ダブルの若者が語る家族とアイデンティティ

～日本育ちの若者の語りから（１）

Family and Identities for Filipino Japanese Youth: Narrative and Life Story Analysis (1)

小ヶ谷 千 穂

フィリピンのバターン州出身の母と、新潟の米農家出身の父から生まれました。5歳年下の妹がいます。日本生まれ、日本育ち、日本語しか喋れません。母は外国人だけど、私は自分のことを日本人だと思っています。

上記のことを外国にルーツのある若者の集まりなどで、自分の気持ちに正直になって話すと、外国人支援をしている日本人の先生から怒られます。「君はそうやって、お母さんを差別するのか！」って。そんな気持ちは1ミリもないし、ハーフだということを恥ずかしいと思っていないし、母も「あなたはハボン（日本人）でしょ」と言ってくれます。

（高橋キコ 2015：33）

1. 本稿の立場と目的

日本育ちの日比ダブル¹の若者たちが自らの家族や母親との関係についてどのように語るのか、というのが本稿の基本的な問題関心である。これまで筆者は、「移動の女性化 feminization of migration」の日本的な現れ方である、フィリピンから在留資格「興行」によって移動してきた女性たちと日本人男性との間に生まれた日比国際児のアイデンティティについて、特にフィリピン在住の彼らが、支援組織の活動に参加する中から、その属性—日本人の父親とフィリピン人の母親の間に生まれた—だけに限定されない日本社会とのかかわりの中で、自ら「JFC (Japanese Filipino Children)」というアイデンティティをトランスナショナルに構築していく過程に関心を持ってきた（小ヶ谷2013）。

こうした、ハーフやダブルと呼ばれる子どもや若者の「ルーツ（roots）」に関心を向ける立場から、彼ら・彼女らがそうした属性を持って生まれた後にどのような生育経験や渡航経験をしてきたのかという「ルート（routes）」に着目する研究が、近年出てきている。たとえば日本におけるフィリピン1.5世の子どもや日本生まれの日比国際児のアイデンティティについて研究した三浦（2015）は、ニューカマーの子どもたちに関する先行研究に言及しながら、「子どもたちが多様化していくなか、ルーツに依拠して、本質主義的に子どもをとらえようとするやり方が綻びを見せ始めている」（三浦2015：7）と論じている。

冒頭の引用も、「母親がフィリピン人なのだから、君も何らかのフィリピンのルーツを意識すべきだ」という日本の「支援者」の暴力的な発言を鋭く突いている。三浦（2015）の調査対象であるフィリピン人母親たちの中でも、「子どものエスニックアイデンティティは『日本人でよい』と述べる」人たちが多く、特に自分の子どもにフィリピン人としてのアイデンティティを持ってほしいとも思わない、と述べている（前掲書：221）。自らが、冒頭の高橋（2015）が言及したような「外国につながる児童・生徒」の支援者である森川も、こうした教師の側からの「カテゴリー化」が、当事者の生徒たちから抵抗される場面を描いている（森川2009：73-74）

他方で、日本社会における「ハーフ」の存在を、メディア表象や言説の政治学の観点から論じている岩淵（2014）らの研究の立場がある。岩淵らの研究においては、一貫して日本社会における〈ハーフ〉（や〈混血〉）のイメージと、それがどのように日本社会において消費され、それに対して〈ハーフ〉とカテゴライズされてきた人々がどのような交渉を展開しているのか、という点が分析されている。

本稿は、三浦や森川らの実証的な研究から導き出された視点、すなわち「ルーツ」に依拠した「カテゴリー化」の罣や暴力について十分認識し、同時に岩淵らが探究する、日本社会における〈ハーフ〉言説の力学も視野に入れながら、研究の出発点をあえてもう一度、研究対象である若者の語りそのものに置き直し、どのように彼らの「家族」や「フィリピン人の母親」、そして、自分自身の「アイデンティティ」といったものが語られていくのか、という点に着目する。言い換えれば、その「ルーツ」と「ルート」とが、日本育ちの日比ダブルの若者

たちにどのように認識され、同時に「ハーフ」言説が、どのように彼ら・彼女らの日常に関与しているのか、という点を、20代の4人の日比ダブルの若者たちの具体的な語りから探っていきたい。

またその中で、筆者自身が対象者に対して、何を「語らせてしまったのか」という再帰的な視点からのインタビュー分析を行い、今後の「ハーフ／ダブル」研究の方法論的手がかりにもしたい。

2. 4人の若者たちと、インタビューの背景

本稿が分析対象とするのは、絵真、美由紀、みさと、洋二（いずれも仮名）の4名の日比ダブルの若者たちの語りである。4名は全員が、父親が日本人、母親がフィリピン人の日比ダブルで、全員が20代前半（1990年代前半生まれ）である。今回のインタビュー・データの特性として、4名がいわゆる「幼馴染」の関係として全員が知り合いであることがある。本人同士だけでなく、それぞれの両親も顔見知りで、特に絵真と美由紀はいとこ同士である。4名は同じ東京都東部のH地区出身であり、父親の家系も代々その地区出身で主に自営業を営んでおり、フィリピン人の母親たちもその地区で父親たちと知り合った、という点も共通している。もちろん後述するように、家族構成や渡比歴などにおいてばらつきはあるが、父親、母親ともに知人関係である4名は、とりわけ小学生のころまでは、常に週末をフィリピン人の母親たちの集まりで一緒に過ごすなどしており、非常に緊密な関係にあった。いわば、母親のエスニックなネットワークと、父親の地縁ネットワークの両方の結節点にあるような日比ダブルの若者たちが、本稿の主人公たちである。

筆者が最初に知り合ったのは、筆者のある講義を受講していた絵真であった。人の国際移動、中でもフィリピンからの人の移動についての講義を他大学から受講しにきていた絵真は、「母親がフィリピン人である」ことを受講当初から筆者に自ら話してくれた。講義の中では、いわゆる国際婚外子であるJFCの話などにも触れたため、同じ日比ダブルであっても婚内子であり日本育ちである絵真にとっては、その「ルート」の違いは驚くべきものだったようだ。その後筆者は絵真から絵真の母親にも紹介され、講義終了後も連絡を取り合ってい

た。こうした筆者と絵真との間のラポールに基づいて、本稿の研究にあたって、彼女の従姉妹である美由紀、そして幼馴染であるみさと、洋二をそれぞれインタビュー対象として絵真が紹介してくれた。本研究はこうした背景を持つスノーボール・サンプリングによるものである。インタビューは、2014年の11月から2015年8月にかけて、それぞれ都内のレストランで行った。筆者との一対一のインタビューではなく、今回の4名の語り手の中心である絵真が毎回同席し、絵真と美由紀、絵真とみさと、絵真と洋二、という組み合わせでそこに筆者を入れた3名で語り合う、という形で計3回実施した。1回のインタビューの長さは平均して約2時間であり、すべてICレコーダーで録音し、その後トランスクリプトした。

なお、1節で述べたように、日比ダブルとしての「ルーツ」と、それぞれの成育歴や家族との関係などの「ルート」をライフストーリーとして語ってもらうことに主眼を置いたため、インタビューにおいては、研究全体の目的について説明したのちに、「母親がフィリピン人であること」を手掛かりに、語り手たちに自由に語ってもらうスタイルをとった。

以下、4名の語り手について、簡単に紹介する。

○絵真（1991年生まれ・女性）：日比ダブルとして都内のH地区に生まれる。

1歳上の兄がいる。両親は絵真が小学校中学年のころに離婚し、絵真は兄とともに父親の下で育っているが、同じく都内で暮らすフィリピン人の母親や、そのフィリピンの親族（美由紀の家族も含む）との関係は続いており、フィリピンへの渡航も頻繁である。母親がフィリピン大使館と良好な関係にあるフィリピン人グループのメンバーのため、絵真自身もしばしばフィリピン・コミュニティのイベントに参加している。大学4年次に筆者の講義を受講。英語と日本語のバイリンガルで、タガログ語も理解し、話すことができる。現在は、外国につながる子どもたちの学習支援活動に従事している。4名のインフォーマントの中でもっとも、「自分が日比のハーフである」ということを意識している。

○美由紀（1994年生まれ・女性）：日比ダブルとしてH地区に生まれる。絵真とは母親同士が姉妹の従姉妹同士。高校卒業後フィリピンで生活し、芸能活動をしていたことがあるため、タガログ語が堪能。日本でのきょうだ

いのほかに、フィリピンにも異父きょうだいがいる。現在は日本で、フィリピン人の母親と暮らしている。会社員として働きながら、音楽のレッスンを重ねている。2歳違いの絵真とは、幼いころからほとんど姉妹のように一緒に過ごしてきた。中学生くらいまではみさとも、親しい関係にあった。

○みさと（1993年生まれ・女性）：日比ダブルとしてH地区に近いR地区で生まれる。1歳ちがいの妹がいるほか、フィリピンには異父きょうだいがいる。妹と美由紀が幼稚園からの同級生で、絵真と美由紀とは小学生の時に同じダンススクールに通っていた。絵真や美由紀と比べて渡比経験は少なく、また家では英語もタガログ語もほとんど使わずに育った。大学卒業後、現在は両親と同居しながら都内で会社員をしている。

○洋二（1991年生まれ・男性）：日比ダブルとしてH地区に生まれる。2歳違いの姉がいる。絵真とは小学校、中学校が同じで、父親、母親同士もそれぞれ親しい。美由紀とも幼いころから知っている間柄である。母親はセブ出身だが、本人は英語もセブアノ語もほとんど話せない。ただし、インタビューを通して、日常的な単語や呼称ではフィリピン語を使っていることを自ら発見する。美由紀や絵真、絵真の兄と比べると自分は「フィリピンっぽさがない」と語る。現在は両親、姉と同居しながら会社員をしている。4年前が最後のフィリピン（セブ）への渡航。

3. 自分の「ルーツ」や「差異」への気づき～小学校時の経験

4名の語り手たちは、上述したように主に小学生時代を中心に、フィリピン人の母親たちのネットワークおよび父親の地縁ネットワークの中で主に育ってきたという共通点を持っている。しかしながら、自分が「日比ハーフ／ダブルである」ことにあらためて気付いた局面は、そのネットワークの「外」である「学校」とのかかわりの中で、それぞれに生じていた。

みさとは、小学校の時の学校の友人との経験について、今でも鮮明に記憶している。

みさと：食べ物、結構小学校のころあって。うち、紫のアイス好きで。

絵真：ウベ？大好き。

（筆者：おいしいよね。）

みさと：それを友達に出したんですよ。もてなすために何かお菓子をおもって。小さいながらにアイスを出そうと思ってました。そしたら…

（筆者：みさとさんが出したのね。）

みさと：そうなんです。で、「なにこれ？」って言われて、「すごい、まずいんだけど。」って言われて。

（筆者：見て、見かけじゃなくて？）

みさと：そうなんです。まず、色でショックだったのかわからないんですけど。その時に、うちの食事って違うんだ、って気づいて。

（筆者：それは何年生ぐらいですか？）

みさと：小学校3～4年生ぐらいですね。多分、あんまり周りとの差を感じなかったの、それまでは。

（筆者：でも、小さい時ってそういうの、「わーっ」ってくるよね。）

みさと：きますね。

ウベとは紫いものことで、フィリピンではアイスクリームやケーキなどに使われるほか、そのまま砂糖や練乳を混ぜてペースト状にしたものなどを、甘味としてよく食べる。自分の大好きなそのウベのアイスクリームを友人に出したところ、「まずい」「なにこれ」と反応された時が、みさとが初めて「自分の家はほかの子の家と何か違う」と気付いたきっかけだったと言う。その後、後述するように、みさととは自分の外見の違いなどから、自分の「ルーツ」についてネガティブに考える時期を迎えることになる。

（筆者：学校で嫌な思いとかしたことないですか？）

みさと：結構、多かった方だと思いますよ。妹はそんなことなかったと思いますけど。

（筆者：そうなんだ。）

みさと：見た目は妹はハーフっぽくなかったの。全然溶け込めていないって感じで。私は逆に浮いちゃって…日焼け止めとかしてましたもん。学校に。結構くせ毛で。母の遺伝なんです。母本当にくるくるなんです。ストパー（ストレート・パーマ）かけても治らなくて。それも自分が特別な感じがしちゃって…なんか本当に人と同じ

じゃないと嫌で。

（筆 者：いつごろからですか？そういうの吹っ切れたりとかは。）

みさと：中学2年生の時に髪の毛全部ストレートにしてやりたいこと全部やっ
たんですよ。その時にたいしたことないなって。自分が気にしてる
だけで、ほかの人からはたいしたことないんだって。そっからは大
人になりました。逆に違っての方が楽しい、みたいな。それを前
に出していこう、じゃないですけど。考え方変わったっていうのは
たぶん中2ぐらいの時ですかね。

美由紀も、やはりフィリピン人母親たちのネットワークの外にある「学校」
での経験を通して、最初に「自分の家庭がほかとは違う」ということに気づい
ていった。

（筆 者：でも、お母さんフィリピンの人だってことは小さいころからわかっ
てた。）

美由紀：そうですね。PTAとかで。小学校の時全員必ず一回は参加しなけ
ればいけない。そういう話を聞いていて、ちょくちょく聞いていて、
（母親が）自分だけ相手にされない、とか。

（筆 者：あー、お母さんが。）

美由紀：そういうの聞いて、なんで自分のお母さんだけそういうのされるん
だろう、と思って。小学生の時は自分自身もそんなにあれだったん
ですけど、中学上がってやっぱ自分が肌の色が黒いとか言われるよ
うになったんですね。

美由紀は、やはり小学生時代にクラスメイトから「フィリピンに帰れ！」と
言われたこともあるという。

みさとと美由紀は、それぞれ「学校」という、それまで育ってきたフィリピン人母親のネットワークや、フィリピン人配偶者を持つ日本人父親たちのネットワークの外の世界に触れた時に、自分たちの「ルーツ」や、「ほかと違って
いること」に直面させられた。

絵真もまた、自分の「ルーツ」をめぐって小学校3年生の時に教室で起こった、ある「事件」について鮮明に記憶している。しかし、その反応は、ほかの子どもと自分との「差異」に気づくというよりも、その「差異」に対して、あ

る意味過剰に反応した教師への違和感であった。

絵 真：「フィリピン野郎！」って言われたことがある。今でも忘れないんですけど、小学校３年生の時にやんちゃな男の子がいて、私の隣の席だったんですよ。なんか話をされていて。で、「フィリピン野郎！」って言われて。私的には、「確かに。フィリピンだけどっ」って思ってた。そしたら、それを先生が聞いていて、その先生が結構フィリピンの歴史とか日本人がフィリピンにしたことを知ってた先生だから、すぐきちゃって、頭に。あの当時、今だったらホントに先生、クビになるんだろうなって思うんですけど、その生徒に飛び蹴りしたんですよ。血気盛んな時期だから（その先生は）27歳とかかな。若い先生で、グッ、てきちゃったみたいで。すごい破壊力で。私が教室の真ん中の手前の席だったのに、その男の子、ランドセルの置いてある後ろまでバーンっていった。（映画の）『少林サッカー』みたいな感じで飛んで。

で、ランドセルのところで、お昼の後だったので、（その子が）もどしてしまってた。その衝撃でね。周り騒然ですよ。先生が生徒を蹴ったっていうのが、まず、何？みたいな。何が起こったの？みたいな。その先生がすごい剣幕で「お前謝れ！絵真さんに対して、フィリピン野郎っていったのを謝れ！」って。で、なんだか歴史の話をちょこちょことして、みんなも、おーってなっちゃって。私は「別にいいじゃん。（先生の）気持ちは嬉しいけど。かわいそう…大丈夫ですよ」って。びっくりして・・・すごい熱い先生なんですよ。今考えると、もうニュース、ニュース。

美由紀：大丈夫？親御さんとか？

絵 真：その男の子の親御さんも理解があったみたいで、彼がそういうこと行ったことに対して怒ったのは大丈夫みたいな。

美由紀：衝撃ですね。

絵 真：あっそうか。話したことなかったっけ。今でも鮮明に覚えている。

でも彼（＝その男の子）がそこまでしたわけじゃないから。もしね、彼の先祖がそういうのにかかわってました、っていうんだったら、

まだ理解できるんですけど。別に彼本人が戦時中にそういうことしたわけじゃないのに、そこは大人としてどうなの？と。

ここでは、絵真の「ルーツ」についての同級生の発言が、絵真本人よりも、担任の教師を刺激し、絵真本人にとってはその担任の反応が、「別にいいじゃん。気持ちちはうれしいけど。大丈夫ですよ」と表現されるような、一步引いた態度をとらせたことになる。

絵真と同じ学校に通っていた洋二も含めて3人がはっきりと覚えているこれらのできごとが、同じ小学校3年次ごろに起こったという共通点に加えて、自らの「ルーツ」の特性が、クラスメイト、クラスメイトの親、自分自身のフィリピン人の母親、教師、という複数の関係者との相互関係の中で浮かび上がってきた、という点は重要であろう。すなわち、「ルーツ」が意識される場面は、常に関係性の中に文脈づけられているのである。

4. 「フィリピンっぽさ」とは何か～「ルーツ」をめぐる自己認識

4名の中でも最も「フィリピンっぽさがない」と最初から語っていたのは洋二だった。

洋 二：ぼくはもう。100%日本人だと思ってますね。

絵 真：けど、私ちょっと違うと思うよ。

洋 二：どこが？

絵 真：（洋二は）超仲間思いなんですよ。

洋 二：えっ？それって別に日本とかフィリピンとか関係ないよね。

絵 真：それなりに家族思いじゃん。

洋 二：それはあれじゃない。人によるんじゃない。フィリピンでもそのなんか、人思いじゃないひとあれば、日本でもいるみたいな。そうじゃなくておれは、やっぱり「あーフィリピン・ハーフだなんて」思う瞬間とかはあんまりない。正直初対面の人でも「ハーフ？」ってきかれることあんまりないですし。

ここでのやりとりは、「フィリピンとのハーフ」であることを4人の中でも意識していると自認している絵真が、洋二の中にある「フィリピン人っぽさ」の特徴としての「仲間思い」「家族思い」という点を強調しようとすることに、

洋二が一種の抵抗を見せているとも言える。洋二がインタビューの特に前半においては、「自分がごく普通の日本人である」ことを強調していたのとは対照的に、絵真と美由紀はそれぞれ、自分の性格の中に「フィリピン人らしさ」を見出していることについて、以下のように語った。

絵 真：でもう、最近はもう。昔は日本人だ自分は、と言い聞かせてきたけど、もう顔に出ちゃってきてるから。認めざるをえない、になったんですよ。私はもう今後ハーフです、って自信を持って言えるのは、こう顔が言っちゃってるから。

美由紀：多分性格も、すごく明るくて、みんなをまとめる。そういうところをふくめて（絵真は）フィリピン人ばいんですよ。

絵 真：否定したいのにできないんですよ。自分はこうなったら。いいとこ見せますから。暗いところは見せない。

（筆 者：本当？自分のフィリピン人熱というか、フィリピン人ばいになって感
じることありますか？何をフィリピン人ばいかっていうのもあります
けど。）

絵 真：舞台とか好き。

美由紀：以前は本当に、人前に出ることも苦手で、恥ずかしがりや。今でもなんですけど。歌を始めてから抵抗がなくなりましたし、むしろなんかみんなの顔が見れて楽しい。そういった面では、やっぱフィリピン人なのかなって思うのと。あと人見知りをしないというの。そういう面ではやっぱすぐ仲良くなれる。

絵 真：私も多分フィリピン人だと思う。

「明るい」「人見知りをしない」「人に注目されることが好き」といった、彼女たちが「フィリピンっぽさ」と認識する特性を自分の中に認める中で、二人はそこに自分たちが「フィリピンとのハーフである」ことを逡巡的に、そして相互に確認しているようにも見える。

家庭の中では日本語だけで育ってきたというみさとは、自分の中の「フィリピンのなもの」について以下のように語った。

（筆 者：じゃあ、あんまり自分の中のフィリピンぽさとか意識することない
ですか？）

みさと：そうですね。そこで言うと、たぶん家族愛が強いかなってというのが。
なんか日本の家庭ってやっぱりあんまり両親とコミュニケーション
取らなかったりとか。友達の話聞いててやっぱりそれは思うので。
そこはたぶんフィリピンの影響だと思います。

しかしこのみさとの語りは、「日比ダブル」について調査研究をしている、
という筆者と、仲間の中でもタガログ語や英語ができてフィリピンへの渡航頻
度も高い絵真とのやりとりの中で、「あえていうならば」という形で、抽出さ
れてきたものと言える。その意味では、冒頭の洋二と同様に、彼ら・彼女らが
自分自身の母方の「ルーツ」としての「フィリピン」をどのように自己認識し
ているのか、という点は、その成育歴やネットワークを含めた「ルート」のあ
り様によって異なっていると言えるだろう。

5. フィリピン人の母親について～母との関係、母への想い

次に、フィリピン人の母親に対して、4人がそれぞれどのような意識や態度
を持っているのか、語りを通してみたい。

以下は、両親が知り合った経緯や、母親の日本での職業についての語りである。
（筆者：ちなみにお母さんが何歳の時に日本に来たか知ってる？）

みさと：私が生まれるちょっと前ぐらいなので…かれこれもう20年前ぐらい。
でも、仕事、聞いたことないです。たまに掃除してるとそれっぽい
写真が出てくるんですよ。ドレスじゃないですけど、そういう感じ
の夜の店のお洋服着てて、まわりにはぬいぐるみがいっぱいあって。
夜のお店かなって。（でも）聞けず。

（筆者：ご両親はどこで知り合ったとか知らない？）

みさと：いや、もうなんかもう父親がものすごいアタックをしてきて、でき
婚ってというのはありましたけど。ママはずっと嫌がってたんだよっ
て聞きましたけど、私もなんか詳細とかは恥ずかしいというか。あ
まり聞きたくないかも。

（筆者：お母さんの就いていた職業とか気になったことありました？小学校
の時。）

みさと：一時期、なんか周りの子たちが両親の話をするときに、やっぱり仕事の話とかも多少あるんですよ。「こんな仕事してるんだよー」とかっていうときに、私は何も知らなかったの。父の仕事しか知らなかったの。その時にちょっと知りたいなっていうのはありましたけど、もう一方で知りたくない気持ちもあって。大体想像つくじゃないですか、大体こういう道を歩むんだろうなって、それだったらそれでもいいんですけど。自分の中で消化できるんですけど、あえて聞く必要もないかなって。向こうから言ってこない限りは。

絵真もみさと、「一番フィリピン・ハーフが生まれている年代」と自らを語るように、また、絵真も幼い時に母親の職場である新宿のパブに連れて行かれたこともあるなど、母親たちが接客業に就いていたことは理解しているが、それを直接母親から話されることも、またそれを本人があえて確認することもない、という経験をしていた。洋二も、地元H地区に、両親が知り合ったスナックがある、という話をしており、母親の職業についてはオープンにされていた。4人の語りから、「母親がエンターティナーであった」ということが、特別な重みをもっていた、ということが語られることはなかった。

他方で、母親自身に対する態度や考えについて、さまざまな語りが共有された。たとえば絵真は、「母親が外国人である」ことを本当の意味で理解したのは最近だと語った。

絵 真：私は、ホント最近思った。「母さんは外人ⁱⁱ」なんだ、と認められたのは（最近）。それまではやっぱりどこかで、日本のソウル（魂）みたいなのを（自分が）持ってて、尺度を日本の尺度で考えてた。「母」のことを、だから理解できないことの方が多かった。

（筆 者：あ、お母さんがフィリピンの人だっていう事は分かってたんだけど、）

絵 真：自分の中で（母は）どういう人なんだろう、って考える時の「人」って、日本人って考えるじゃないですか。親でもあるのにも関わらず、なぜこういうことがわからないんだろうと。

（筆 者：それはこう外国人性みたいなのを母親に感じたってこと？）

絵 真：感じて。逆にそれでクリアになったんですよ。あつ、外人なんだと。母さん外人だからしょうがないんだよ、と。

小学生の時に両親の離婚を経験した絵真はとりわけ、母親が「どんな人なのか」ということについて関心が高かったという。両親がどのように知り合ったのかを懸命に探索しようとした態度からもわかるように、絵真は４人の中で最も、「母親」を理解することに心を傾けてきた。その「母親」を、「外国人」として受け入れられるようになったのが最近であり、そこが彼女を「自分が日比のハーフ」として自己認識させる契機となったと考えられる。

みさととは、幼いころから「母親の言うことを聞いてあげる」というスタンスで過ごしてきたと言い、最近ではそのことを「親子関係の逆転」と呼んでいる。

みさと：（母親と友人たちは）定期的にカラオケ屋に集合してます。

絵 真：そう。R地区のX（＝カラオケ店）はね。部屋まで決まってるんで。（笑）

みさと：（母から）「電話して」って電話させられる。

（筆 者：してあげるの？）

みさと：小学校のときからできるだけ母の言うことを聞いてるので。

（筆 者：どうして？）

みさと：幼いながらに、自分のなかでも辛い思いをさせてるなっていうのは子どもながらにわかってて。ほかのお母さんとのやり取りだったりとか、やっぱり授業参観とか行くと目立っちゃうんで。どうしても。（母は）言葉もやっぱり前は不自由だったの。やっぱり私が何かしてあげなきゃ感がすごくて。（自分が）長女だったっていうのもありますけど。なるべく自分でやりましたね。

今でもそれはあって、妹は逆に言うこときかなかったの。今やっとして感じですね。（私は）なんでもやりましたね。

絵 真：お母さんが、日本語できないってだけでも自分がしっかりしなきゃってね。

みさと：しっかりしなきゃ感があって多分こうなったんですけど。

（筆 者：別にそうしなきゃって言われるわけじゃないでしょう？）

みさと：今でもそうですね。買い物とかもうちの母は駅や電車使えないので。隣駅までも危うい感じで。

（筆 者：それはなんで？）

みさと：多分、新しくなってくるじゃないですか。Suicaとかが出始めて、

それからはもうだめですね。ボタンが多くなるじゃないですか。“切符”って欄を選ばないと切符になんなかったりとか。最初は130円でポチって押して買えばよかったんですが、それが変わった瞬間にダメッと思ったのか覚える気もあんまりなくて、それが加齢と共にもう、すぐ忘れちゃうので、もうあきらめてますね。

（筆者：結構日常のお世話とかなんかもそういう感じ？）

みさと：そうですね。買い物も結構一緒に行きますし、ほんとに基本的に一緒に何でもします。（母が）髪切りたいっていったら予約もしますし。ほんとに逆転した。本当に親子逆転したって感じです。母基準なんですよ。だから多分家族のことを理解してくれない男性って私からちょっとつばねちゃうので、その条件をクリアしてくれる人がいい。

みさとは、厳格な姑（みさとにとっての祖母）や、必ずしもフィリピン文化に理解を示さない父親と一緒に日本で生活してきた母親を、「異なる文化の中で苦勞した女性」と考えて幼いころから接してきていた。そこにはこうした想いがあるようだ。

みさと：そうですね。その部分では（＝高齢の祖母を在宅で看取ったこと）かなり尊敬していますね。知らない土地に来て、いじめられつつも自分を育ててくれたっていうのはあるので。多分、兄（＝フィリピンの異父兄弟）もまだ小さかったんですよ。向こうに残してきて私たちの面倒を見てくれたので。なんか恩返しじゃないですけど、（母に）頼まれたことは基本的にやるっていうのは私の中でスタンスとしてあって。

そういうみさとは、自分自身のパートナーについて話が及んだ時に、次のように語った。

絵 真：彼氏はさ、日本人がいいの？

みさと：私絶対日本人。

（筆者：どうして？）

みさと：なんででしょうね。なんかやっぱちょっと現実味。そういうのもある。やっぱ文化の違いの大変さっていうのも身をもって知っている

ので、自分の子どもが苦勞するんじゃないかと思うとなかなか踏み込めずに…

「子ども時代の苦勞」が具体的にみさとや絵真から語られることはなかったが、以下のような友人の日本人の母親との比較についての語りは、その点を示唆している。

みさと：幼稚園終わったところ…やっぱ小学校ですかね。小学校とかで父兄が来る行事とかって多いじゃないですか。やっぱり、そういう時にほかのお母さんとの差っていうのは気づきましたね。あつ、こんなに（ほかの家庭では）円滑にコミュニケーションが進んだとか。

絵 真：わかる。わかる。

みさと：うちはほんと、辞書とか引っ張り出してきて、英単語とかを調べてそれでやっとながらって感じだったので。そこは感じましたね。

絵 真：日本人のお母さんたちとコミュニケーション取る方が早かったときとかない？たとえば友達のお母さんと。

みさと：確かに。早いね。（うちは）聞き返してくるからね。「えっ？今のどういうこと？」って。「今のどういうこと？」っていうのが（いつも）あるので。そういうところで、なんていうんだろう、引け目じゃないですけど、そういうのはありました。どれくらいかな？それこそ（それまでは）美由紀とか絵真ちゃんとかいたから、そんなに違うんだっていうのがあんまりなかったんですね。当たり前で友達がいてその子たちもフィリピンのハーフでってみたい。多分そういう環境だったから、。

6. フィリピンの親族、フィリピン・コミュニティとの関係

第2節で紹介したように、4名の語り手はいずれも小学生頃の年齢まで、母親のフィリピン人ネットワークの中で友人関係を築いてきた。その後も、フィリピンへの渡航を繰り返す絵真や、滞在歴もある美由紀と、中学に入ってからフィリピンに渡航していないみさと、また4年前が最後の渡航になる洋二それぞれに、フィリピンの親族や日本のフィリピン・コミュニティとの距離感は

異なっている。

洋二は、セブの母親の実家に行った時の体験を次のように語った。

洋二：物心ついてから初めて行ったフィリピンは、たぶん小学４年生とかで。

（筆者：何か衝撃とかあった？びっくりしたこととか。）

洋二：小４の時びっくりしたのは、なんですかね。あの、停電があったんですね。日本だったらブレーカーやれば済むって話なんですけど、その時は町中が真っ暗で、その時は暑かったんですけど、クーラーもつかないですし。復旧も全然されないっていう感じで。

（筆者：ろうそくをととして？）

洋二：そうですね。そういう感じでした。全然いい思い出がないですね。そこらへんでちょっと用を足したりしてる（人もいる）し、なんだここは？って感じですね。ひいばあちゃんが生きてたんですけど、ひいばあちゃんがこんな（＝あまり元気ではない）感じで、姉ちゃんと一緒に行ったんですけど、抱きつくのもなんか、。“エンブレイス”っていわれても、（うちの）お姉ちゃんも拒否し始めて。

（筆者：怖い、みたいな？）

洋二：やっぱこんな感じだったの。姉ちゃんは嫌がったけど、僕は強く抱きしめましたね。（笑）

（筆者：じゃあ、セブとかに帰って、いとかに会うときにどんな気持ち？）

洋二：いや、もう他人ですね。

絵真：さみしい…

（筆者：話できないよね。）

洋二：できないですね。一応、まあ英語で気を使って話してはくれますね。でも、やっぱ僕が最初に行ったときはまだ小学生だったので、その時はABCだったらまだ俺の方がわかるぞっていう子もいたんですよ。もちろんわかる人もいますが。フィリピンでいうといとこの中では僕が上から二番目だったんですよ。なんで、姉・僕、それからまたフィリピン人なので、やっぱいとこは年下しかいないんですよ。（彼らも）英語もそこまで達者じゃないんですよ。もちろん僕よりは達者ですけど。僕がまず英語わからないので、コミュニ

ケーション・ツールがないですね。

（筆者：結構苦痛ですね、。）

洋 二：（最後に行った時も）僕はもう、こうしてる（＝放心状態）だけです。
でビールの瓶があったら飲むぐらいで、あとは冷房があったら（そこに）立ってるだけです。

（筆者：暑いから？）

洋 二：それ以外は本当に。ないですね。あっ、叔父の方がわかりやすい英語を使ってくれるんで、その人とはしゃべりましたね。

絵 真：セブ行って何してるの？

洋 二：いや、さっき言ったのもう終わりだよ。

絵 真：結構日数あるよね。

（筆者：一週間ぐらい。）

洋 二：３日は行くかな？３日間ぐらい（放心状態）。

（筆者：「（フィリピンに）行きたい！」とか思わないんですか？）

洋 二：正直、行きたいとは思いませんね。いここに会いたいとかはありますけど…進んで「うっし、今からフィリピン帰らない？」っていうのは言いませんね。

これに加えて、セブで滞在したホテルの設備の悪さなどについても語った洋二だが、母親が出身地であるセブ以外にマニラにも家を持っていること、また母親が常にスカイプなどでフィリピンのきょうだいと話をしていることなどもよく知っており、日常生活の中にフィリピン側の親族の存在が常にあることは語られていた。

母親がフィリピンに送金し、それによって親族のための家が建てられていることについて、みさとは次のように語っていた。

みさと：結構フィリピン女性って自分の実家の面倒みてくれているスタンスで結婚するじゃないですか。うちもかなり結構お父さんお金使ってるとかですし。家改築したんですよ、フィリピンの。（日本の）実家よりも豪華なんですよ。らせん階段とかあって、高そうなソファ３つぐらいあって。

（筆者：見たの？）

みさと：facebookでいろいろ見たんですけど、うそでしょ、みたいな。（以前は）
ブレハブみたいなのところだったので。だいたい改築しちゃって。

（筆者：日本で成功してるっていうのの証みたいなの。）

みさと：前からの夢みたいで。ほんとにそれしか夢がないんですよ彼女。叶ったからまあいいや。次はプールとか言い出して。

移住者が移動先に定住したのちも出身社会との社会経済的紐帯を保ち続ける「トランスナショナリズム」（Basch, Glick Schiller and Blanc eds., 1994）は、洋二やみさと、そしてもちろん絵真や美由紀にとっては日常の風景なのである。

他方で言語（タガログ語）ができるという意味で、日本におけるフィリピン・コミュニティとの接触の度合いが大きい絵真と美由紀は、母親やその友人たちとのコミュニケーション、さらに両親とのコミュニケーションについて、次のようなりアリティを語った。

美由紀：ちょっと（母とその友人達が）たまに空気が読めないというか。

絵 真：わかるそれ。わかる本当に！

（筆者：え、日本でってこと？）

美由紀：フィリピンで、あの、やる分にはいいんですけど、日本でその、いきなり大声出すとか、ここはそういうところじゃないよ、って言っても・・・いいじゃない、みたいな（母たちの反応で）。

（筆者：空気が読めない感じか。そういうとき板挟み感覚ある？両方の感じがわかるみたいな。）

絵真・美由紀：辛い！

美由紀：辛いですね。どうしたらいいのって？ごめんなさいって思います。

絵 真：申し訳ないですって・・・周りを見るようになりますよね。他の人よりも、気にする。

（筆者：空気読んじゃうんだね、じゃあ、逆にね。）

美由紀・絵真：先に読んじゃうんだよねー。

（筆者：確かに読めない人がそばにいますとそうかもしれない。）

絵 真：だから、普通の日本人よりも空気を読んでも時もある。

（筆者：確かに。敏感になるよね。それって、あれよね。子どもとしてフィリピン人のお母さんの空気の読めなさにハラハラするとかきつとご

両親との関係とまた違うんだらうね。想像だけど。）

絵 真：間を取り持つようになるよね。何事にも。

（筆 者：フィリピンの人たちと一緒にいる時とかっていうこと？）

絵 真：それもそうだし。父と母の意見の食い違いとかも、結局母はこういうこと言いたいんだけどわかってないし、父はこういうこと言いたいんだけどわかってないし、みたいな間をとるようになるし。母のコミュニティの時は母のフィリピン人の文化と日本の文化の間をとる持つ。どこでも間になるよね。偏れくない？

美由紀：偏れない。

絵 真：それ偏っちゃうと自分の中のフィリピン人を消すことになるし、フィリピン人によれば日本人を消すし、。

絵真と美由紀は、電車の中やディズニーランドなどでのフィリピン・コミュニティとのやりとりを回想しながら、母とその友人たちの「空気の読めなさ」について、その感覚がわかるゆえに周囲の日本人に対するきまりの悪さ（美由紀の言う「ごめんなさい」、という感情）を感じる人が多いと語った。

7. 「ハーフ」である、ということについて

4人の語り手たちは、いずれもインタビューの後半で、自分自身が「ハーフ」である、ということについて、さまざまな形で語ってくれた。そこには、本人たちの成長に伴う意識の変化と、日本社会における「ハーフ」のプレゼンスの上昇という社会変化の両方が影響していた。

幼い頃に自分が「ハーフ」であることをネガティブに考えていた経験のある美由紀とみさとは、自分自身と、周囲の環境の変化とを以下のように語った。

美由紀：最近（「ハーフ」であることを）ほんと誇りに思っていて、自分から言いますね。自己紹介の時に。若い時はハーフっていうのがすごく嫌で、言えなかった、っていうのもありますし。母にあたってしまったこともありますよね。「なんで私はハーフなんだ」って、。

（筆 者：それはお母さん、辛いね、）

美由紀：今思うと、申し訳ないんですけど……

（筆 者：自分がこう大人になってきたからね、それともまわりの社会の風潮なのかな。言いやすくなったのかな。）

美由紀：両方あると思います。

（筆 者：二人が小さかった頃と、今って日本の感じも変わってるから。結構学校の感じもね。）

みさと：そうですね。前ってハーフの子って結構珍しかったんですよね。お前は、結構、自分とは違う、みたいな。ほとんど、（そういう風に）言われてたんで。今って、ハーフうらやましい、とか。結構逆転してきてて、最初はそれについていけなかったです。

インタビューの冒頭では、「100%日本人」と語っていた洋二も、「ハーフ」としての自分を受け止めかねていた時期があったことをこう語った。

洋 二：なんていうのかな？ 僕一時期ハーフっていうのがいやな時期っていうのがありましたね。なかった？ あるでしょ？

絵 真：あった。

洋 二：そんなには長くないですけど、日本人の小学校の友達はやっぱり・・ちょっと顔違うかな？ ぐらいの何かがあったんですね。自分はフィリピン・ハーフっていうのは大分まあ、早くから知ってたんで、ハーフっていうのが別に少数派とかそういうことも考えてなかったの。普通はみんな日本人・純日本人だ、っていうのもなかった中でも、なんか日本人の顔に近くないかなって？ 思った時もあったので。そういう時は純日本人になりたいっていう時期でしたね。今は全然思っていないですけど。

現在の洋二は、「ハーフ」であることを、次のように受け止めている。

（筆 者：今は？）

洋 二：今は全然思っていないです。ハーフっていっぱいいますし、テレビにもいっぱい出るようになって。なんかハーフっていうブランドっていう風にも感じましたし。もともとハーフがテレビに出る前から、そういう考えはなくなりましたが、本当1年間ぐらいは、（自分が）日本人だったら（何か）変わってたのかもしれないって考えましたね。

（筆 者：それは何歳ぐらいの時？）

洋 二：それは小学校高学年ぐらいの時。もう中学の時は考えなくなりましたけど。俺はもういいやって。これはしょうがない…っていうか、ハーフをブランドとして考えてるよね。あの、結局少数じゃん。レア的な感じ。フィリピン・ハーフは結構いるかもしれないけど、ハーフの中でね。

絵 真：そうだね。

洋 二：ハーフっていうブランド、その希少価値として俺は受け取ってる。「(君は) 純日本人でしょ？俺はハーフだからね」ぐらいの。そこでなんもないけどね。そこに差はなんもないけどね。

絵 真：確かにね。

洋 二：話のネタの一つにもなるけどね、初対面の人との「僕、実はハーフなんですよね。どこ（の国）かわかりますか？どこでしょう？」みたいな。初めて会う人に会話するときに、どこだと思えますかって、その場しのぎじゃないですけど。それに近い何かになるじゃないですか。そういう感じになりますね。絵真は知らないけど。実はハーフなんだけどって絵真は言うか知らないけどね。

自分にとっては、変えられない「しょうがない」属性である「ハーフ」であることを、「ブランド」や「ネタの一つ」として使っている、という洋二に対して、美由紀と絵真は、「ハーフ」という言葉が必ずしも自分たち、フィリピンとのハーフを指していない場面に直面した経験を持っていた。

美由紀：最近ホント、ハーフの芸能人多いよね。

（筆 者：多いよね。）

美由紀：急にここ何年か。

絵 真：急に反旗を翻したかのように。ホントにやだって思っちゃう。

（筆 者：あ、ほんと？それは小さい時に苦労したからっていう事？）

絵 真：苦労したというよりも、勝手に苦労してるんだと思うんだけど。私の場合は思い込みが激しいタイプなので。なんかでも、やっぱり東南アジア系のハーフよりも西洋のハーフの方が…こう、なんだろう…

美由紀：わかる。

絵 真：わかる。わかるっしょ？

美由紀：すごく分かります。

絵 真：「アメリカのハーフなんだ」「フランスのハーフなんだ」とか。なんかハーフの差があるような。

美由紀：あるよね。

（筆 者：そういうのあるのか、）

美由紀：中学の時とか、（周りが）「ハーフっていいよね」って。「アメリカが良いよね」って感じで。私、私どうしよう。私も純日本人だったらそう思うんだらうなって。だけどやっぱり、ちょっと悲しくなっちゃって。「ハーフっていいな」って（みんな）思ってるけど、そういう東南アジアとかじゃなくて西洋とかアメリカがいい（と思っている）。わかっているんですけどやっぱり傷つくというか。

絵 真：傷ついているから、私は逆に提案していた。じゃあ、逆にどう思う？って。私、フィリピンのハーフだけどどう思う？って聞いてた。そうしたらみんな黙る。

（筆 者：黙るんだ。）

絵 真：「あっそうだよね」って。

（筆 者：気づくってことね。）

美由紀：本人たちは悪気はない。

絵 真：悪気はないんだけど。あとは、「ハーフだから英語が喋れるんでしょ」って言うのがいやで。必死に勉強してきて頑張ってきたのに、ハーフだから、当たり前のようにしゃべれるって思われるの悔しいんですよね。ただリスニングがいいだけで、「絵真はハーフだから英語が出来て当たり前だ」って。ひとくくりにされても。

ここで美由紀や絵真が語る、「ハーフ＝西洋系ハーフ＝英語が話せて当たり前」というまなざしの暴力性は、岩淵ら（2014）らの指摘と共通している。こうした日本における「ハーフ」言説の暴力性を感じながらも、絵真は「ハーフ」という呼称について、独自のポジティブな解釈を持っている。

絵 真：私結構「ハーフ」って好きだな。ピザのハーフ&ハーフみたいじゃないですか、こっちの味もあればこっちの味もあるよって。両方楽しめるって感覚。それで一つになってるって。一石二鳥じゃないけ

ど。「ダブル」っていうと、増しちゃったかなって。二枚になっちゃったっていう。なんか、ピザーラが「ハーフ&ハーフ」を始めた瞬間に、私もこのハーフなんだ、こっちの味も選べて、こっちの味も選べて、でも一つなんだよって。あっそういうことかと思って。「ダブル」って言葉も勉強して覚えるじゃないですか。いや、でも私は「ダブル」より「ハーフ」のほうが好き。

この絵真の語りは、「ハーフ」は差別的であり、「ダブル」という呼称のほうがより「正しい」という支援者や研究者にしばしば見られる認識と見事な対比を見せており、示唆的である。

これに対して、高校を卒業後にフィリピンでの生活経験がある美由紀は、「ジャピノイ（Japinoy）」という呼称が好きだと語る。しかしそれを使う場面は、フィリピンと日本では異なっている。

美由紀：私「JAPINOY」ですごい好きなんですよ。日本人とフィリピン人のハーフって日本では言うじゃないですか、そのことが同時に言える。

絵 真：そう思うと私は自分のこと、「JAPINOY」って言えない。日本人とフィリピン人のハーフって言っちゃうから。結構多分まだ自分の中で日本人感が抜けない。

美由紀：フィリピンに行ったら絶対「JAPINOY」って言いますけど、日本だと初めて会った人とかには、名前とかをいってこうもうちょっと話が盛り上がったなら、けっこうその人が旅行とか行く人であったら、その話でいけるかなって思うし、自分も歌をやっているのどこで歌ってるの？ってなった時に、フィリピン・コミュニティで歌うイベントとか多いから、「なんでフィリピンなの？」って聞かれるなら最初から言っちゃったほうがいいかなっていうのはあります。

8. インタビューが「語らせた」こと～関係的なものとしてのライフストーリー・インタビュー

以上、4名の日比ダブルの若者の語りを、自分の「ルーツ」や周囲との「差異」への気づき、自分の中の「フィリピンっぽさ」の認識、フィリピン人の母親への想い、フィリピンの親族やフィリピン・コミュニティとの関係、そして、

自分自身が「ハーフ」であるということへの意識、という手がかりの中から考察してきた。いずれも、「フィリピン人の母親を持つ子ども」という一つのカテゴリーにおとしこんで簡単に単純化することはできない、その成長過程や家庭の言語環境、母親たちの出身階層（絵真と美由紀の母親たちのフィリピンでの親族は、裕福な階層に属している）、学校経験、そして個人のパーソナリティといった条件の中に状況づけられた語りであった。これらの語りのほかにも、日比家庭の具体的な多言語状況などについて、さらに興味深い語りを集めることができたが、それらの分析は別稿に譲りたい。

暫定的に、本稿での４人の語りから見えてきたこととして、以下のことは確認されるだろう。まず彼ら・彼女らが、自分自身がほかの子どもたちと「違っている」ことに気づいた契機は、それまで彼ら・彼女らがおかれていた在日フィリピン人やその日本人配偶者のネットワークの「外」にある、「学校」という場を通してであったことだ。しかし、絵真の経験が示すように、それは必ずしも単に「差別された」という体験ではなく、「自らのルーツがからかわれることに、大人が過剰に反応する」という事実の体験でもあった。また、４人がインタビューの中で、お互いの中にそれぞれ「フィリピンらしさ」を見出そうとしたり、それを確認し合ったり、時にはそれを拒否するようなやりとりが見られたことも重要であろう。きわめて近い境遇の彼らの間にあっても、「フィリピン」的な要素を自分の中に見出すことに関しては、ちょうど「ハーフ」ということをどのように受け止めるか、ということに見られた違いと同様に、広がりが見られた。しかしながら、それを必ずしも「フィリピン的な要素が強い」と言わなくとも、みさとや洋二の家庭の「日常の風景」にあったように、フィリピン側の親族と彼らの生活とは密接に結びついていた。

こうした中で最後に、このインタビュー調査が、彼らに「語らせてしまった」ものは何であったのか、ということについて考察しておきたい。「僕は日本で生まれて日本人として生きてきたんで。考え方とか日本人と大差ないかなって思います」とインタビューの締めくくりに語った洋二と、絵真そして筆者の間でのインタビューでは、「朝にシャンプーをするのはフィリピンの風習だ」という話題で盛り上がった。絵真は、それをフィリピン・スタイルだと認識しており、洋二は、「自分の家の習慣だと思っていた」と言った。また、洋二は、

母の友人や親せきの女性たちを、「ティタ・〇〇」「アテ・〇〇」（ティタは、フィリピン語で「おばさん」、アテは、「お姉さん」の意味の意味で、それぞれ親しい年長の女性に対して、名前の前につける呼称）と呼んでいた。しかし、このインタビューに加わるまで、それが「フィリピン風の呼び方である」ことを意識することはなかったという。実際、洋二は「ティタ」と「アテ」の具体的な意味やニュアンスの違いを知らない、と話した。こうしたいくつかのエピソードを通して筆者に突き付けられるのは、このインタビューを行う、という行為そのものが、たとえば洋二の中にはそれまで「なかった」かもしれない、「フィリピン」的な要素を、むしろ彼の中に「作り出させて」しまい、「語らせてしまった」のではないか、という再帰的な問いである。この点について、ライフストーリー研究の第一人者である桜井厚は次のように述べている。

「ライフストーリー研究では、語り手は情報の提供者であり調査者がその情報の分析者であり解釈者であるという単純な二分法はとっていない。語り手も、調査者とのインタビューの相互作用をとおして、出来事がなぜどのように起きたのかを評価し、それがいかなる意味をもっているのか、登場人物の行為や動機が何かを説明する解釈過程に参加しているのである」（桜井2014：167）

この桜井の言葉によるのならば、洋二がこのインタビューを通して、「自分の家庭の中にあるフィリピン的なもの」について新たな発見をした、ということは、このインタビューの「相互作用」の帰結と言えるのかもしれない。こうした相互作用としてのインタビュー調査の特性が、「ハーフ／ダブル」のアイデンティティ、という研究課題の中でどのように活かされるのか、もしくは場合によってはネガティブな影響を持ちうるのか、という点については、稿を改めて論じたい。

計3回のインタビューの後いずれの語り手からも、「自分のルーツについて考える、よい機会になりました」という言葉が筆者に向けられたことは、ライフストーリー研究で言われる「カタルシスとしてのインタビュー」が、わずかながらでも実現できたことを意味しているかもしれない。ライフストーリー研究の同じく第一人者である小林の次の言葉を持って、本稿の締めくくりとしたい。

「インタビューとはナラティブの形で経験を組織することであり、『個人が経験に意味をあたえる』やり方とむすびついている。自己の経験を組織し、ライ

フストーリーとして物語ることは、エンパワーメントされたり、カタルシスが表出されたり、語り手自身になんらかの変化がもたらされて、そしてある種、現在の自己の肯定作用がある。（中略）語り手にとっての語ることの意味をふまえることがインタビューのよりよい実践へつながるのだろう」（小林2005：117）

※本稿は、科学研究費（基盤研究C）「トランスナショナルな移動経験を通した日比ダブルの若者のアイデンティティ構築」（研究代表者：小ヶ谷千穂）による研究の成果である。なお、本研究においては、リサーチアシスタントとして藤巻恵美さんに多大な協力を得た。記して感謝したい。また、インタビューに協力してくれた4名の皆さんにも心からの謝意を表したい。

【参考・引用文献】

- Basch, Linda, Nina Glick Schiller and Cristina Szanton Blanc eds., [1994], *Nations Unbound: Transnational Projects, Postcolonial Predicaments and Deterritorialized Nation-States*, Amsterdam: Gordon & Breach Science Publishers
- 堀口佐知子・井本由紀2014「ミックス・レースはどう語られてきたかー「ハーフ」にいたるまでの言説をたどって」岩淵功一編著『〈ハーフ〉とは誰か～人種混雑・メディア表象・交渉実践』青弓社。
- 岩淵功一2014「〈ハーフ〉が照らし出す人種混雑の文化政治」岩淵功一編著『〈ハーフ〉とは誰か～人種混雑・メディア表象・交渉実践』青弓社。
- 小林多寿子2015「ライフストーリー・インタビューを行う」桜井厚・小林多寿子『ライフストーリー・インタビュー：質的研究入門』せりか書房。
- 三浦綾希子2015『ニューカマーの子どもと移民コミュニティ：第二世代のエスニックアイデンティティ』勁草書房。
- 小ヶ谷千穂2013「支援組織との関わりから見るJFCのアイデンティティと複層的な“日本経験”～「JFC研究」のための試論～」『国際交流研究』第15号 pp. 189-213。
- 桜井厚2012『ライフストーリー論』弘文堂。
- 高橋キコ2015「Youth Column ユースコラム No.1」移住労働者と連帯する全国ネットワーク『Mnet』182号 p. 33。
- 森川与志夫2009「国際結婚家族の子どもたちの『声』ーカテゴリー、エスニシティ、アイデンティティ」『人権問題研究』9号 pp. 67-75。

-
- i 本稿では、両親の国籍や出身国が異なる人々、特に日本の文脈で、日本人と外国人との間に生まれた人々のことを「ダブル」と表記する。本稿でも論じるように、「ハーフ」「ダブル」という呼称に関しては、当事者も含めて、必ずしも定まっておらず、また、「ハーフ」と呼ぶか、「ダブル」と呼ぶか、もしくは「ミックス・レース」と呼ぶか、その呼称そのものが議論の争点になっていることが多い。（岩淵 2014）また当然、語りの中で「ハーフ」という言葉が使われた際にはそのまま「ハーフ」と表記している。
- ii ここでの表記の選択（漢字の「外人」）は絵真自身による。